

令和4年度 第4回丸森町読書感想文大賞



読書大好き♡感想文大賞

入選作品集



丸森町教育委員会

目次

【小学生の部】

大賞

ゆうなとステイビー・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

審査員奨励賞

おかねについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

「きみは「3・11」をしていますか？」

を読んで・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

佳作

せんそうをやめた人たち・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

平和な世界を目指すには・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

身近な事から脱炭素・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

学べる環境を作りたい・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

【中学生の部】

大賞

「セカイを科学せよ！」を読破せよ！・・・・・・・・ 8

審査員奨励賞

「時間」とは何か・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

さばの缶づめ、宇宙へいく・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

佳作

「終止符のない人生」を読んで・・・・・・・・・・ 11

窓ぎわのトットちゃん・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

今夜、世界からこの恋が消えても・・・・・・・・ 13

【一般の部(高校生以上)】

大賞

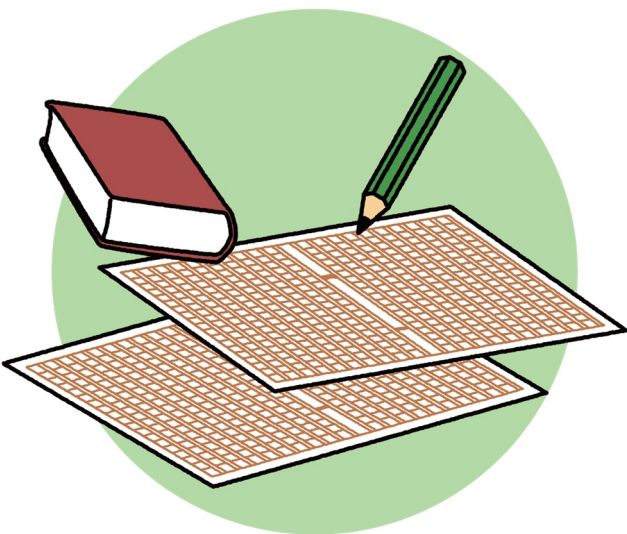
お天道様は見てる 尾畠春夫のことば・・・ 14

佳作

人生はニャンとかなる！

明日に幸福をまねく68の方法・・・ 15

「80才の壁」を読んで・・・ 16



小学生の部

大賞

館矢間小学校 5年 佐藤 花恋

表題「ゆうなとスティービー」

書籍名『ゆうなとスティービー』

私がこの本を選んだ理由は、じいちゃんの家で和牛を飼っていて出産や出荷を見ていたので、この本の子牛がどうなっていくのかとても気になったからです。

「ゆうなとスティービー」は、5才のゆうなの和牛農家になん産の末に生まれた子牛が、かるうじて命は助かったもののまったく目が見えない牛だったのです。

ゆうなのお父さんは、スティービーワンダーと言う盲目の歌手の名前を子牛につけました。スティービーが生まれてから三度目の春。どっしりとした牛になり、おだやかにトラックに乗って出荷されていきました。

私は、この本を読んで、いろいろなことを考えました。

一つ目は、命のたん生です。生まれてくる時に時間がかかったり、色々なこんなんやたん生のあり方があると言うことです。

二つ目は、命の大切さです。目が見えなくて、他の牛とちがっても、命は同じです。大切に育てることで、大きく育ち、出荷され、みんな同じ生き方ができるのです。

三つ目は、命をつなぐと言うことです。牛は、生まれて育てられ、出荷され肉になります。私達は、生まれてきた動物の命をもらって生きているのです。そのように命はつながっていると言うことです。

この本を読んで、私は動物に感しゃしたいと言う気持ちが強くなりました。これからもじいちゃんの手伝いを通して牛に感しゃの気持ち伝えながら出荷までの時間をせい一杯お世話をしたいと思えます。

審査員奨励賞

丸森小学校 1年 山野辺 翠

表題「おかねについて」

書籍名『100円たんけん』

この本のおとこのこはおかあさんのおてつだいをし
て、百円のごづかいをもらいました。おみせですぎなだ
がしを百円ぶんかいました。ちよつぴり百円をこして、
一こもどしたけど。

おとこのこは百円のかちで、ほかにどんなものがかえ
るのか、ほかのおみせにさがしにいけます。にく、さか
な、パン、すしやさんなどに。むかしのおかねのないじ
だいは、ぶつぶつこうかんをしていて、きにいるとあく
しゅできめていた、とおかあさんにおしえてもらった。
いまのじだいは、トマト一つときゅうり三本、りょうが
ちがうのおなじ百円で、もののねうちっておもしろい
とおとこのこはかんじたみたい。

わたしは、百円をもらいユーホーキャッチをやりま
す。ママはやめてといています。じぶんは、うれしいたの
しいドキドキかんをかっています。きんじよの人や、と
しょかんのおねえさんからくだものややさいやおかしを
もらうときがあります。いつもきてくれるからだって。
わたしももだちに、てづくりのものをよろこんでもら
いたいからあげています。

おかねをつかってもたのしみやたべものはかえる。で
も、おかねをつかわなくてもよろこびはつたわる、とお
もいました。

審査員奨励賞

丸森小学校 6年 齋藤 颯太

表題 「きみは「3・11」をしっかりとっていますか？」
を読んで」

書籍名 「きみは「3・11」をしっかりとっていますか？」

ぼくは、きみは「3・11」をしっかりとっていますかと言う本を読みました。なんでこの本を読んだかと言うと今、自分たちが住んでいる宮城県も、東日本大震災の被害にあつたので、この夏休みと言つきかいに東日本大震災のことについて読んでみるのも、いいんじゃないかと思い読むことにしました。

この本は、石ノ森章太郎と言うまんが家の記念館みたいな場所で地震による津波で石ノ森章太郎記念館にひなんしてきた人たちと5日間すごすことになります。でも、こわくて泣く人もいれば、お年よりの人たちもいて、たいへんなのにも対し、余震や、近くの場所での火事など心配すること多いいけれど、みんなと協力して、5日間、すごす

という内容の本です。

この本を読んで一番心に残ったことは、ひなんして来た人たちと協力して5日間、過ごす所です。

なぜこの場面が心にのこった理由は、ぼくたちも、2019年に、丸森町に台風19号のえいきょうにあつたからです。東日本大震災の時は生後四ヶ月だったので強さや被害の量などは知りませんが台風19号の強さは実感しています。台風19号の時は水や電気などが約一ヶ月止まり毎日がたいへんでした。けれども、自衛隊の人々もきてくださったり丸森町に住んでいる人、全員と協力をしてここまで復興してきました。正直ここまで復興することはできないと思っていました。けれど町民との協力があり、ここまで復興することができました。

今回、この本を読んで学んだことは2つあり、一つ目は東日本大震災の強さ、こわさを改めて思いました。

二つ目は、東日本大震災や、台風19号など大きな自然災害が来たとき町民や色々な人々と協力することを学びました。次からも町民や県民などと協力をしていきたいなと思いました。

佳作

丸森小学校 1年 八巻 陽虹

表題「せんそうをやめた人たち」

書籍名「戦争をやめた人たち」

ぼくは、せんそうをやめた人たちをよんで感じたことをかきます。

ぼくは、せんそうをじっさいにけいけんしたことがありますませんが、この本をよんであらためてこわいなとおもったことが、ぼくのだいすきなクリスマスにたたかっていたことです。ぼくは、たたかいじゃなくて、サンタクロースにきてもらいたいです。

つぎに、てきどうしがサッカーやうたなどでなかよくなっていておどろきました。ぼくもサッカーやうたのことがだいすきなので、きょうかんできます。

さいごに、いまでもせんそうはつづいていきます。ぼくは、かぞくやともだちがいなくなるのがすごくかなしいので、せんそうがやくおわることをねがっています。

佳作

丸森小学校 6年 穴戸 璃子

表題「平和な世界を目指すには」

書籍名「自由への道」

差別はあつてはいけないものです。私は、この『自由への道』という本を読んで、改めて差別はあつてはいけないとより強く考えるようになりました。

この本は、自由を求めて奴隷解放に力を尽くし、闘った黒人女性ハリエツト・タブマンのお話です。

私がこの本の中で一番すごいと思ったところは、ハリエツトが自分のために一度は一人で逃げて、他の奴隷や家族を助けるために、命をかけてまで故郷に戻ったことです。彼女は自由を求めて逃げました。しかし、家族や友人のいない世界では、心の底からは喜べず、とても心細かったのです。そこでハリエツトは家族をここに連れてくると固く心に誓い、そのために働いてお金を稼ぎました。ある日、奴隷として競売にかけられた姪を助けたことをきっかけ

に、誰一人も脱落させることなく百二十人も奴隷を救出しました。その人としての精神力の強さや、命の危険を伴っても思いやりを忘れないその行動は、誰にでも真似できるようなものではありません。このような彼女の姿をとても尊敬しています。

現在、奴隷制度は廃止されましたが、人種差別やジェンダー差別など、色々な差別がまだ根強く残っています。差別のせいで、やりたいことができなかつたり、家族や友人と一緒にいられないのはとても悲しいことです。

私はこんな奴隷制度や差別を許せません。差別をなくし、平和な世界を目指すには、差別に苦しんでいる人たちの現状を知り、皆が差別は起きてはいけない、してはいけないと認識することが大切だと思います。

これから先、世界の人人が差別がない世界があたり前で、一人一人の個性を認めて大切にすることがこの世界から差別をなくす第一歩だと思います。

佳作

館矢間小学校 5年 二階堂 春輝

表題「身近な事から脱炭素」

書籍名『はじめての脱炭素』

サステナブル、脱炭素、どちらも一度は耳にしたことがある言葉だ。正直なんのことかわからなかった。テレビなどで、環境問題を取りあげていたのを見たことがある。そのときは、わからなかったけど本を読んでみて地球に大変なことがおこっているとおもった。温室効果ガスが増えすぎたことによって地球の気温をあげすぎてしまっている。

地球がおんだんかするとたくさんいへんがおこるようになる。すでにいくつかのいへんが世界では起きていることをぼくは知った。感染症が増えたり、南極や北極などの寒い地域や、高い山などにある氷が解けると、海に水が流れこんで海の水位が上がって低い土地や島は、沈んでしまう危険性があるということ。

ぼくは、コロナに感染して高熱を引き起こし死んでしまう怖さをテレビで見えて知っているし、氷が解けることで自分の済んでいる場所がなくなってしまうたら大変だし生きていけるか心配になった。そのほかにも異常気象が発生してその影響で、長い間雨が降らず水が不足して農作物の収穫量がへり結果水や食べものが不足してしまう。今実際に経験しているこの暑さも温暖化が原因なんだとおもった。はげしい雨や強い台風が多く被災している地域があり温暖化はしんこくであることに気付いた。記憶に新しい令和元年の東日本台風では、ぼくも大変な経験をしました。それがこれからもひんぱんにおこるんだと思う。

温暖化の影響を最小限にするために、世界各国で「パリ協定」という共通の目標を立てて、平均気温の上昇を一度までにおさえることを決めました。この温度をおさえることによって食料や水不足、それから災害でこまる人の数が大きく変わることにおどろいた。ぼくは、自分に出ることを考えた。二酸化炭素の排出量を減らすのに再生可能エネルギーでつくられた電気を利用したり、電気の節約をすることで大きな削減になるのだ。たとえば、気温にあわせて服をきたり、お風呂に入るときや手をあらうときに

はこまめに水を止めてむだづかいしないようにしようと思った。

最後に、ぼくと同じ考えを皆がもって行動をして少しでも脱炭素につながればうれしいです。

佳作

館矢間小学校 6年 小野 華音

表題 「学べる環境を作りたい」

書籍名 『まんが人物伝 ナイチンゲール

看護に生きた戦場の天使』

私の夢は、貧しい国に住んでいる子どもたちを救うことです。この本もきっかけになった一つです。

ナイチンゲールは大富豪で恵まれた環境で育っていました。けれど、貧しい人のためにかんご士になる選択をしました。当時はそのような考えではありませんでしたが、反対されても人の役に立ちたいという強い意志を持った人だと感じました。「あきらめという言葉はわたしの辞書にはない。」という彼女の言葉は、むねにひびきました。私も思いがかべにぶつかって進まないときは、この言葉を思い出しています。

以前、授業である国の子どもが家族のために働いているビデオを見ました。毎日ゴミの山へ行きそのゴミを売ってお金をもらっていました。私は、悲しいと思ったと共にと

てもしょうげきを受けました。その子の宝物は、以前行っていた学校の教科書でした。日本の子どもたちは、教科書を宝物だと思う人は数少ないと思います。私はその子どもたちを働かずに、学校に行ける環境を作りたいと思っています。私達は当たり前のように学校に行ったり、ゲームをし、ご飯を食べることができます。しかしそれが当たり前ではない国もある事が分かりました。

今実際、戦争のニュースがたくさん流れている中、私はその度に悲しい思いや悔しい思いになります。今、きずついている子どもたちがたくさんいます。その子達も笑顔いっぱい毎日を過ごしてほしいです。そして働かずに学校へ行けるようになってほしいです。ナイチンゲールのように強い意志を持って一人でも多くの子どもの救いたいです。



中学生の部

大賞

丸森中学校 1年 菊地 秀成

表題「セカイを科学せよ！」を讀破せよ！」

書籍名「セカイを科学せよ！」

この物語では、「科学とは、物事の本質を追究すること」というフレーズが何度も出てきます。

物語の主人公は、ロシアと日本のハーフで中学二年の藤堂ミハイルです。ミハイルには悩みがあります。それは見た目だけで「ガイジン」と呼ばれることです。なので、立つことに危険を感じています。

そんなミハイルの学校に、ハーフの転校生山口アビゲイル葉奈がやってきました。葉奈はミハイルとは正反対で、何でもはっきり言える人です。

葉奈が好きなものは「蟲」。しかし、中学生の皆は虫を嫌う人が多く、葉奈はボツチになってしまいます。僕も虫はそこまで好きではありません。なので、もし葉奈のような転入生が来たら、僕も距離を取ってしまうかもしれません。

それでも、葉奈は理科準備室で生き物の飼育監察を始め、そのことで様々なトラブルに巻き込まれますが、そんな出来事を通して、科学部のみんなと仲良くなり、また、部員たちは、「蟲」をきちんと理解することで、「虫は気持ち悪い生きもの」という決めつけを無くしていきます。これが「物事の本質を追究する」ということだと思います。

この物語では「蟲」の本質を追究していますが、最初に出てきた「ハーフの人」も同じだと思います。外見ではなく、その「人」自身のことを理解することが、「物事の本質を追究する」ということです。

この物語のタイトル「セカイを科学せよ！」とは、「世界中の人々を互いに理解し、尊重しよう」ということを示しているのだと思います。

僕もこれからは、物事を外見だけで判断せずに、「本質」を追究し、本当の面白さを理解しながら生活したいです。

審査員奨励賞

丸森中学校 1年 天野 千尋

表題「時間」とは何か」

書籍名「モモ」

私は、この本を読む前から時間とは何だろうと思っていました。中学生になり、小学校のときよりも勉強や部活があり、忙しいからでしょうか。一日が二十四時間であることは変わらないのに。過ぎるのが早く感じます。

この本の主人公、モモは相手の話を聞くのがとても上手な女の子でした。モモには親友が二人いて、掃除夫ベツポとおしゃべりな若者のジジといました。ある日「時間どろぼう」の灰色の男達が時間を奪おうとする企みを知ってしまい、マイスター・ホラと協力して、みんなの時間を取り戻すお話でした。

時間を奪われた町の人々は、イライラしておこりっぱくになりました。時間を節約するようになり、大人達は子供にかまう時間もなくなりました。

灰色の男達がいうむだな時間には、睡眠、年をとったお母さんの世話、インコの世話などが含まれていました。私はいずれも人間だからこそする事なので決してむだな時間ではないと思いました。確かに苦手な勉強をしている時は長く感じますが、大好きな猫や家族と過ごしている時間はあつというまに過ぎてしまいます。楽しい、辛いなど感情の違いはありますが、時間は生きることそのものなのだから、命と同等ではないでしょうか。私はどんな時間も大切だと思います。

最後に本の中で、心に残ったなぞなぞがあります。

「一番うえはいまいない(傍点)、これからやつとあられる二ばんめもない(傍点)が、こっちはもう出かけたあと。三ばんめのちびさんだけがここにいる。それというのも、三ばんめがここにいないと、あとの二人はなくなってしまうから。」

最初は意味が分かりませんでした。落ちついて考えるとすてきな答えになります。この本が教えてくれたように、時間は過去に戻せないのです。後悔しないように時間を大切にしながら生きていきたいと思えます。

審査員奨励賞

丸森中学校 1年 小野 早苗

表題「さばの缶づめ、宇宙へいく」

書籍名『さばの缶づめ、宇宙へいく』

「さばの缶づめ、宇宙へいく」という長いタイトルはとて私の興味をひきました。さばの缶づめは私も食べたことがあって、それが宇宙へ行くというのは、読む前から不思議な気分させられました。物語は小坂先生が水産高校にやってきたことから始まります。

最初の方からすごい言葉が読んでもる方になげかけられます。「この学校、潰れるで」高校が舞台の物語なのに潰れるとはどんな状況なのか、物語が始まる前におわってしまうんじゃないかと思わせるような文の始まりでした。

小坂先生のやってきた高校はみんなやる気がなく、先生たちも手をやいてしまうような生徒たちばかり、そんな中で小坂先生は生徒たちが何をやりたいのか、どんなことに興味をもって取りくんでいけるのかを考えはじめ、そしてさばの

缶づめと宇宙食ということにたどりつき、みんなでいろいろと苦労して工夫してさばの缶づめをJAXAに認めてもらい、宇宙食としてロケットとともに宇宙にいくというストーリーで、実際にあった話という所が一番すごいと思いました。普通の高校の先生や生徒たちが宇宙に思いを届ける所は、最初の方でかかっている先生や生徒たちの雰囲気とは全然かわっていて、物語の中で少しずつ変わっていく姿がとても自然にえがかれていて、本を読んでいるのに、まるで、自分がその場所にいるかのように物語の世界に入っていくきました。自分の身近なところにある風景にも、この物語のようなことがおこるかもしれない、人はどんな人でもかわっていくことができるんだということ、そして、ちょっとしたことでも、それがやってみようと思ったときから、無限の可能性を持つということに気づかせてくれた本だと思います。特に私はいろいろな困難を先生や生徒たちが、アイデアを出して話をすすめていく所が好きです。一人の力ではできなくても、みんなの力があればできる、この形は、私も強く意識していきたいと思いました。

佳作

丸森中学校 1年 八巻 鉄心

表題 「『終止符のない人生』を読んで」

書籍名 「終止符のない人生」

「シ、ラシレフアラシレフア」胸を突き抜けるようなピアノの音に、私は心ゆさぶられました。その音は、類を見ない、透き通るようで重厚な音色でした。私が好きなピアノニスト反田恭平。この人がどんな人生を歩んできたのか知りたくて、この本を選びました。

昨年反田さんは、シヨパン国際ピアノコンクールで、日本人として五十一年ぶりに第二位に輝きました。その快挙を成し遂げるまでの人生は、決して平坦な道ではなかったようです。

わずか十九歳でロシアのモスクワに渡り、音楽と語学に励みました。一日六時間ロシア語を勉強しながら、並行してピアノのレッスンを受けたそうです。時には、ささくれだった鍵盤の木材が壊れて指にとげが刺さり、流血するこ

ともありました。旧ソ連出身者が教だんに立っているせいか、一瞬たりとも気を抜けません。無理難題を課題にするのは日常茶飯事。それでも、反田さんは前を向いて戦い続けるのです。その人生の旅路の中、いく度となくチャンスがめぐってきました。休憩所がわりに使っていた小さなカフェで、無料演奏をたのまれ弾いていた時、その中に偶然音楽関係者の方がいて、「あなたの演奏にとても感銘を受けました。ぜひうちのコンサートで弾いてください。」とオファーをいただくのです。これは始まりに過ぎず、まさかまさかの偶然が続くのです。反田さんはこう述べています。「いついかなるときも全身全霊で取り組まなければならぬ。手を抜かない。たったそれだけのことなのだ。愚直にして真摯な姿勢を失ったものは、人生のチャンスをつかみ損ねるのだ。」と。

諦めずにやり遂げること、そしてチャンスは誰もが掴み取ることができることを知りました。私は今日から、何事にも諦めず、全力で取り組むと、心に決めました。

佳作

丸森中学校 1年 平塚 晃太

表題「窓ぎわのトットちゃん」

書籍名『窓ぎわのトットちゃん』

何の本を読もうかなあ。何か面白い本、家にあつたかなあ。と考えてみた時に頭に浮かんだのが、この「窓ぎわのトットちゃん」だった。僕が小さい頃、夜、寝る前の読み聞かせで、母が読んでくれていた。内容ははつきりと覚えていなかったが、トットちゃんが通っている小学校の校長先生である小林先生のことを、何だか凄い人だなあと思つたことだけは覚えていた。

改めて読んでみると、やはり面白い。

ちよつと変わった小学一年生の女の子トットちゃんは、初めに入学した小学校では授業にならないという理由でお母さんが探してきた「トモ工学園」という学校へ転校する。初めて校長先生に会った時、校長先生は、トットちゃんの話は何時間もずっと聞いてくれた。その後も、トット

ちゃんは、毎日、生き生きと学校へ通い、色んな出来事を通して成長していく。

ある日、トットちゃんが髪にリボンをつけて行くと、校長先生の娘さんが、「私も欲しい。」と言い、校長先生は、「どこで売っているの。」とトットちゃんにたずねる。そのリボンが外国製だと分かる。

「明日から、つけないで来てもらえるかな。」

とお願ひする。トットちゃんは、

「いいよ。」

と答える。

この話を読んで、年齢や立場に関係なく、一人対一人の人間同士として、先生が子供と関わっていることに、とても感動した。

他にも、沢山の出来事が書かれていて、そのどの話を読んでも、先生やお母さんが、トットちゃんを子供扱いせず、ちゃんと話を聞き、信じ、見守り、一緒に考えていた。

僕も、小林先生のように行動できるようになりたい。

佳作

丸森中学校 3年 菊地 歩実

表題「今夜、世界からこの恋が消えても」

書籍名『今夜、世界からこの恋が消えても』

私は、「今夜、世界からこの恋が消えても」という本を選びました。その理由は、家族や友達と毎日一緒にいることが普通だと思っていた自分に新しい考え方を教えてくれた本だからです。

特別に目立つ容姿をしていない透が、前向き健忘という夜眠ると一日あったことを忘れてしまう病気を持っている真織に嘘の告白をし、偽りの恋が始まります。しかし、それが偽りとは言えなくなったころ、二人の恋が突然終わりを迎えてしまう物語です。

この作品で特に印象に残った場面は、透が心臓突然死で亡くなってしまった場面です。この場面を選んだ理由は、透のことを覚えていない真織なのに、透が亡くなったことを聞いて涙を流したからです。その涙は人が亡くなった時

の悲しみの涙だけではなく、大事な人が突然消えてしまった苦しみの涙だったと思います。私が中学一年生の頃、曾祖母が老衰に近いような形で亡くなってしまいました。私は泣かないように我慢していましたが、何度か泣いてしまいました。それを思うと私は大事な曾祖母が世の中から消えてしまった苦しみから、泣いてしまったのではないかと思い、非常に共感しました。

この本を読み始めた時は、ただの恋愛物語だろうと思っ
ていましたが、読み進めていくにつれて、大事な人と毎日一緒にいれることは普通のことではないのだと教えてくれました。

この物語を通じて、私は一日一日の大切さを学ぶことが出来ました。明日が来るのは、あたり前ではないからこそ、一日一日を大事に生きていかないとはいけません。今後の生活では、大事な人を想って行動することが出来る透のような人になろうと思いました。

一般の部

大賞

齋藤 信一

表題「お天道様は見てる 尾畠春夫のことは」

書籍名『お天道様は見てる 尾畠春夫のことは』

本書は、2018年に失踪した2歳児を救出し、一躍時の人となった尾畠春夫さんへの長期インタビューを基にしており、各章ごとに、その半生や現在の活動を筆者の目で追った「ルポ」と、彼の一人語りを再現した「ことば」の2つのパートで構成される。

前半の章のルポでは、10歳で農家の奉公に出されて学校に通えなかったこと、各地で魚屋の修行に励み、独立開業後は進取の気性でお客様に親しまれる商売を続けたこと、そして65歳の誕生日に店を閉じてボランティアに献身したことなどが綴られているが、特に極貧の中で酷使と空腹に耐えた少年期の回想には、深く胸が痛んだ。

後半の章のルポでは、これまでのボランティア活動の経緯が展開されるが、私は2019年台風19号による災害

ボランティア以降に、同種の活動に参加しているので、自分と対比しながら読み進めた。私よりも20歳年長の尾畠さんは、普通なら解決困難な案件を現場の機転で次々にクリアしたが、これには若い頃に鳶職に就いていた経験などが活かされている。「人生の経験で無駄なことは一つもない」という尾畠さんのことばは重い。

もう一つ印象深いことばは、災害が発生した場合に地元でボランティアに参加する人は意外に少ないということだ。私も3年前にボランティアに参加した際に同じ思いを抱いた。尾畠さんは、まず思い切って行動してほしいと言っている。当時60歳で自宅が被災した私でも、何とか活動できたのが、その証左だ。

最後に書名の「お天道様」とは、子どもの頃に亡くなったお母さんのことであり、あの世でお母さんに会ったら、「春夫、よくやった」と褒めて抱き締めてもらいたいと結んでいる。私もあの世で祖母に、「すんいづ（信一）も、役に立つことしたんだない」と言ってもらいたい。そんな気がした。

佳作

加島 陽智

書籍名『人生はニャンとかなる！』

明日に幸福をまねく68の方法』

近年、「自分は猫の下僕だ。」という人をよく見かける。自由気ままな姿や愛らしい鳴き声、モフモフとした毛に、ストレス社会を生きる私たち人間は日々癒していたいでいる。猫は今も昔も人間にとって欠かせないのである。ではなぜ人間はここまで猫に魅了させられるのだろうか。それは（本人ならぬ本猫が意識しているかどうかは置いて）自分らしく生きる姿や、それぞれ抱える問題へ立ち向かう姿を体現しているからではないだろうか。私は本書の数々の名言と、それを体現する猫の姿を見てそう強く考えた。

一つ例を紹介しよう。アメリカの作家、リチャード・バツクの名言「ゆずれない道がある」のページだ。ここではこの名言と共に白黒の数匹の犬が道を塞いでいる中、猫が塞がれた道を通ろうとする姿の写真が添えられている。こ

の名言は自分が優先すべきと思うことに遠慮はいらないのだという思いが込められている。私はこの名言と写真を見た時、実家で暮らしている猫を思い出した。

私の実家にいらっしやる八チワレ猫は自由気ままだ。人間が食事を取る時でもダイニングの椅子を占拠したり、外に出たい時はドアを開けるよう催促したりする。正直手がかかると思っていたが、見方を変えたと自分の意思を貫く生き方を見せてくれたのだとも考えられる。本猫が意識しているかどうかは分からないが…。

外の名言においても「これはあの場面ではないか。」と思うものが多くあった。本書を読まなければ、猫の何気ない行動の意味を考えることはなかっただろう。そして、あの小さい身体の持つ力に気づくことができなかつただろう。嗚呼、だから猫様の下僕はやめられない。

佳作

石井 敬子

表題「80才の壁」を読んで」

書籍名「80才の壁」

この六月に齡八十を迎えた。心とは裏腹に日々肉体の衰えを感じる。速足で歩けなくなったり、座った状態から立ち上がるのの難儀なことなど、特に身体機能の衰えが著しい。これが老いなんだと実感する日々である。そんな折、「八十才の壁」という本を知った。一文一文、自分の老いと照らし合わせながら、興味深く、一気に読破した。いちいち納得したり共感したり、一冊すべて身になった感じがする。

著者は高齢者を幸齡者と称し、老いることは決して不幸なことではない。老いをしっかり受け入れ、老いを逆手に取って、老いと共に豊かな日々を言う。特に病院との関係が深くなってくる。検診の数値にあまり惑わされることなく、良き家庭医を見つける。そして、あれも駄目、これも

駄目と我慢を強いられると、ストレスの多い生活になる。八十才を過ぎたら、くよくよせず、気楽に生きる。そうすると免疫力が高まり、病気が寄ってこないという。身体的機能は若い時の半分以下、食欲も減退するが、その残った機能を生かす。だめになったからといって使わなければ、退化する一方である。無理なく動く機能を生かす。いたわりながら生きよという。日本は世界一の長寿国、六十五才以上の高齢者が三分の一にのぼる。福祉も整いつつあり、高齢施設も豊富である。人生百年時代に突入、今後増々高齢者は増える、それと共に認知症問題、介護問題、医療費の問題等が重くのしかかる。国の施策としてしっかり取り組んで欲しい。

自分にも残された日々はそう多くはない。日々衰え行く各機能をいたわりながら、一日一日を大切に暮らしていきたい。著者である精神科医の和田秀樹氏の本著を熟読吟味し、老いと仲良くし、愛おしみたい。本書読後、自分の老体にながれ自信がついた感じで、ここしばらくは元気に生きられそうである。

令和4年度第4回丸森町読書感想文大賞
読書大好き♡感想文大賞 入選作品集

発行日 令和4年10月16日

編集 丸森町教育委員会

〒981-2192

宮城県伊具郡丸森町字鳥屋120

0224-72-3036